

11. 総胆管に対する手術の術前・術後の

¹³¹IBSP シンチグラム所見

朝日生命成人病研究所 消化器化

岩瀬 透 鶴沼 直雄 佐々 隆之

〔研究目的〕 総胆管に対する手術を受けた症例の術後の胆道機能については、なお解明されなければならない点が多い。本研究では、総胆管に対して手術を行なった症例について、¹³¹I BSP 経時的腹部シンチスキャニング法によって、術前・術後に胆管内の胆汁の流れの状態を記録し、術後の胆道機能を明らかにすることを試みた。

〔方法〕 対象とした症例は、総胆管結石摘出術あるいは乳頭形成術を施行された、総胆管結石7例・乳頭炎による総胆管末端部狭窄2例の計9例である。

¹³¹IBSP 経時的腹部シンチスキャニングは、¹³¹IBSP 投与量・記録時間などすべて同一条件で実施することを原則とした。術前の¹³¹IBSP シンチグラム記録は、1例を除きすべて発作のかん解期に、術後の記録は手術後3～15カ月経過し安定した時期に実施した。シンチグラム所見の対比にあたっては、¹³¹IBSP の肝内主要胆管あるいは肝門部うっ滞像・肝外胆管うっ滞像の強さと継続時間に重点を置いた。

〔成果〕 まず総胆管に対する手術を受けた全例が、自覚的にまた臨床生化学的にはほぼ完全に改善していたにもかかわらず、¹³¹IBSP シンチグラムでは、9例中の6例に術後もなおはっきりした胆管内胆汁流出障害所見を認めたことが注目される。

術前・術後を比較すると、術前に比して術後に¹³¹IBSP シンチグラム所見が改善したものは、9例中5例であったが、悪化したものは2例であった。残りの2例は不変であった。悪化した2例中の1例では、その後に膵臓炎を伴った胆道炎と考えられる発作が起っていることは特記すべきである。

〔結論〕 以上、総胆管に対する手術の術後にも¹³¹IBSP シンチグラムで観察した限りでは、胆汁の胆管通過性に問題のある場合の多いことを指摘した。

12. Renoscintigram の Computer Processing による臨床的考察

慈恵医科大学 泌尿器科

三木 誠 町田 豊平 上田 正山

南 武

日本無線医理学研究所

森 瑞樹 小野谷 明

RI を利用した腎の形態および機能検査法としては、Scintiscanner による renal scintiscanning と scintillation camera による renal scintiphotography がある。ところが現状では腎実質内病変の描出が必ずしも十分とはいえない。そこで最近では computer 処理により臨床的価値を高めようとの試みが盛んになっている。

今回われわれも次のごと装置を使用し、各種腎疾患につき腎実質内の病的部分を細く検討したので報告する。

使用した装置は日本無線製で、scintillation camera RVE-203 型、小型 Computer JAC-120 型を中心とした data 処理 system を接続したもので、外部記憶装置に magnetic dram, magnetic tape などを有しており、時間に対して変化を伴う RI image を、任意の間隔で切目なしに100枚まで収録することができる。また data 収録後 oscilloscope 上に再生し、任意の興味ある領域を指定し、その領域における RI の変化を曲線として描くことができるものである。

症例は泌尿器科的腎疾患9例で、²⁰³Hg-chlormerodrin または ¹³¹I-Hippuran をそれぞれ 200 μ Ci 使用した。²⁰³Hg-chlormerodrin 投与時は、静注直後より5分迄30秒間隔で10枚、ついで10分より40分まで90秒間隔で20枚の scintigram を収録し、¹³¹I-Hippuran 投与時は静注直後より5分まで15秒間隔で20枚、または10分まで30秒間隔で20枚収録処理検討した。

その結果 ① profile curve により分腎および部分的腎機能が半定量的に評価できる、② regional renogram ともいべき任意の腎内部分の経時的 RI 変化が判る、③ cold area の dynamic な観察から腎内病変の鑑別の可能性もあるなどのことが判った。今後症例を増し、各種 RI を選択使用し、装置の改良、programing の工夫などを行なえば、腎実質内病変を更に追求でき、本法の臨床的価値も高くなるであろう。